# ＥＳＤで『つなぐ学び』を創造する

静岡県富士市立岩松北小学校　四條　秀樹

## １．はじめに ～ 「空間・時間・問い」と「自分」をつなぐ

本校の学校教育目標は「新しい自分をつくていく　ぼく・わたし」である。この目標に迫る大きな軸がＥＳＤであり、その目指す子ども像は「教科や領域、家庭や地域、過去や未来と今をつないで、よりよい未来を創っていくために、学び考え行動する子」として、学校グランドデザインに謳われている。

ＥＳＤを一言で表現すると、「つなぐ学びの創造」となるのではないかと考えている。つなぐものとは、上述したように、総合的な学習や教科・領域の学習であり、身近な地域から世界という空間であり、過去から未来という時間である。また、新しく出合った素材が、これまでの学習とつながらないとき、その子の中に「あれ？」「どうして」「考えてみたい」という問いが立ち上がる。その問いを仲間と探ることで、新しい問いがまたつながっていく。このような学びの考え方と、一つ一つの学習を俯瞰してつなぐという作業が、ＥＳＤという教育なのではないだろうか。そして学びをつないで整理し可視化したものがＥＳＤカレンダーである。本校は、ＥＳＤカレンダーを活用しながら、つなぐ学びの創造を目指している。肩に力を入れたものではなく、普段の授業を少しＥＳＤという視点で整理したものを、以下で紹介する。

## ２．実践報告

### （１）造形教育で学びをつなげる

#### ①「黒の造形」をつなぐ　＜４年生＞

＜墨と遊ぶ・墨で遊ぶ・墨を遊ぶ＞

４月。春の温かな空気に包まれた校庭のけやき広場で、木のことばを感じ取ることから始めた。手で木肌を触ったり、腕をまわして幹の太さを実感したり、耳をあてて木の言葉を感じたりした。そうすることで、「どっしりとした感じ」「つるつるした太い幹」「春風にそよぐ葉っぱ」など、その子の中に表したいものが生まれてきた。ここで描画材料として木炭を与えた。初めて出合う画材に新鮮な気持ちで造形表現に集中していく子どもの姿があった。黒だけで線描をしていくと、線の形や濃淡に子どもの意識が集中していった。黒で力強さや柔らかさを表すことができることを、子どもは発見していった。

＜墨の量と筆先でたくさんの黒を表現＞

５月。木炭による黒の造形を経験した４年生に、墨の造形遊びを体験させたいと考えた。書写の時間の筆の約束から解放された子どもは、面で塗る、にじませる、絵を描く、垂らすなどの遊びの中で、墨の特徴を感じ取っていった。図工室に漂う墨の独特の匂いの中で、大きな紙や和紙、キッチンペーパーなどを用意し、自分で画材を選びながら表現を楽しんだ。大きな紙に友達と線を描くと、友達との自然な呼吸が生まれていき、お互いのリズムに触発されながら、体全体で黒の造形を味わう姿があった。

６月。墨の造形遊びを経験した４年生に、「できるだけたくさんの黒をつくりだそう」と投げ掛けた。薄める水の量を調節しながら、濃さを変化させていく子どもたち。木炭の体験がここに意識的に、または時として無意識につながっていると考える。筆圧や筆先の

使い方も濃さの変化の要素であることは、子ども自身が発見していった。

この「黒の造形」の授業の途中に、アクリル絵の具の三原色でポスターを描く授業を入れた。無彩色の世界から、有彩色の世界へ思考を飛ばすことを狙い、ジョアン・ミロ（スペイン）の作品に出合わせた。ジョアン・ミロの単純化された形と、原色の鮮やかな表現に触発された子どもは、アクリル絵の具の質感の鮮やかさを生かしながら、有彩色の色の表現を楽しんだ。

７月。鮮やかな色の世界を味わった子どもに、もう一度黒の造形の世界に浸る時間を設定した。その子の主題が生まれるように、絵本「三匹のやぎのがらがらどん」を読み語りした。一つの共通の話を聴くことで、ある方向性が示され、子どもは自分のトロルをどう表そうかと思考していった。現実にいる生き物ではないため、表現の自由度は高く、「これがわたしのトロルだよ」と主張できるようにした。

<見える形と色を根拠に自分の物語を語る>

９月。県立美術館から「屏風　四季花鳥図」（レプリカ）を借用し、水墨画の鑑賞授業を行った。日本の美に触れることで、その魅力に浸りながら、自分たちが行った墨の造形に一人一人がつながってくことを願った。友達との対話から、自分の中に物語が生まれていった。遠くに見える山を鬼ヶ島に見立てた子どもは、これから鬼退治に行く物語を嬉しそうに語っていった。多様なものの見方・考え方のやりとりの経験が、「芸術を生み出す素晴らしさ」「自分と違った見方ができる友達の良さ」「その友達とつながる自分」を感じ、「生きる喜び」を味わう時間となった。

<この形から人々の苦しみが伝わってくるよ>

12 月。「木版画でぼく・私のお正月を表そう」を行った。版画の巨匠、棟方志功の「東北風の柵」の鑑賞にあたり、パブロ・ピカソの「ゲルニカ」も添えた。戦争に対する怒りの思いを描いたゲルニカに深い衝撃を受けた棟方志功は、東北の風土の貧困や飢餓に対する悲しみや怒りを「東北風の柵」に表した。ピカソと棟方の、人間社会への悲しみ、慈しみ、幸福への祈りを感じ取るよう、言葉を添えた。この鑑賞の後、東日本大震災に触れ、被災地の方は仮　設住宅でどんなお正月を迎えたのだろうと心を寄せる時間を創った。また、ＡＬＴの先生には母国フィリピンのお正月の様子も話していただいた。ここから、ぼく・私のお正月の下書きを始め、初詣やお節料理、温泉など日本の文化が描かれた。また、卒業生が残した版画作品を彫り跡の参考とすることで、彫り方の工夫に気付き、彫刻刀の種類を使い分けながらさまざまな彫り跡を生かしていった。黒のインクで刷り上げた作品は、活き活きと表現された。

<フィリピンでは大きな音と丸い食べ物でお祝いをするよ>

## ②「世界文化遺産ふじさんを表そう」＜２年生＞＜５年生＞

普段見慣れている富士山。世界文化遺産となった今、改めて自分の中にある富士山に迫ろうと考えた。

２年生では、新聞紙の造形遊びから、「つなげる」という活動に絞り込み、机で組んだ骨組みにかぶせることで、新聞紙ふじさんを共同制作した。それまでに作ってあった廃材を利用した生き

<新聞紙をみんなでつないで遊ぼう>

物を、富士山のまわりに住まわすことで、「富士山世界文化遺産おめでとうパーティー」を演出した。

５年生では世界文化遺産登録の新聞記事から、葛飾北斎の「富嶽三十六景」の鑑賞につなげた。昔から日本人が富士山を芸術の対象として描いてきたことを知る事で、世界の人にもっと富士山の素敵な所をアピールしようと投げ掛けた。想像力をかき立てるしかけとして、円に切り取った画用紙を配付。描画材料はチョークとした。円の画用紙は時として地球であり、月や太陽などの天体であり、丸窓であったりする。そこには、重ねるぼかす、伸ばすなどチョークの特徴を生かしたその子の決めた描画方法が見事に表れてきた。朝焼け、夕焼け、夜の富士など一枚一枚にその子の物語が生まれる。同じ対象が、これだけ多彩な表現を生むところに、改めて富士山の魅力を感じた。クラス全員で富嶽三十二景ができた。

<富士山世界遺産おめでとうパーティー>

<水面に映る逆さ富士>

### ③美的体験をつなぐ　<5年生>

始まりは、６年生ありがとうの会に向けて「思い出の門」を作りたいという５年生の学年集会だった。そこで県立美術館と連携し、図工の時間にオーギュスト・ロダンの「地獄の門」を鑑賞し、そこから「思い出の門」のデザインにつなげた。

地獄の門（布に印刷された実物の１／３）をじっくり鑑賞する子どもは、そこに見える色や形を根拠に、自分の中に生まれてくる物語を語っていった。よじ登ったり落ちたりする人や、苦しむ人の姿から地獄の門が開いた向こう側の世界に想像を広げる子もいた。また、地獄の門の上にいる「考える人」は何を考えているのかという問いが生まれ、自分の見方を語り合う時間となった。この鑑賞が、思い出の門のデザインにつながっていくことになる。「楽しかった６年間を思い出してほしい」という思いが、形や色に意味を持たせていった。そして柱の周りに６年生の輝いていた姿や、ランドセル・机・給食などの思い出のモノを紙粘土で制作し取り付けていった。

また、世界の美に触れた子どもに日本の美にも出合わせたいと考え、ＭＯＡ美術館と連携し、尾形光琳の国宝「紅白梅図屏風」（レプリカ）の鑑賞も行った。左右の木の色や描き方、真ん中の黒の部分について、感じ取ったことを語り合った。自分はこう感じたということを語り合うことで、お互いにつながりあう豊かな時間となった。

<地獄の門の考える人を考える>

<心を込めて思い出の門を制作中>

<国宝紅白梅図屏風を前に語り合う>

### ④6年生ありがとうの会

造形教育の学びを、特別活動の学習につなげた。２年生では色水で染めた布を使って、風と影との造形遊びを行った。その布を「６年生ありがとうの会」の会場に飾ることで、２年生の気持ちを伝える手立ての一つとした。また、５年生では、番線を使って６年生と

<２年生染めた布の造形>

一緒に行った組体操を表現した人形を会場に飾った。番線ならではの大きなポーズに６年生は目を輝かせていた。共同制作の「思い出の門」も設置した。思い出の門をくぐって入場する６年生は、そこにある思い出の形をじっくりと眺めながら、これまでを振り返っているようだった。造形表現が２年生と５年生の心と６年生の心と共に、笑顔もつないだ豊かな時間となった。

<５年生　番線人形の組体操>

<思い出の門から入場>

### ⑤「ぼくもわたしもアートする」夏のワークショップ

夏休みに、富士市内の先生方と市内の小学生を対象としたワークショップを行っている。「森の妖精」「森の妖怪」「ぼくもわたしもどろんこ隊～土壁作り」などのテーマに沿った造形表現を子どもも大人も楽しんでいる。平成２４年度は、「進め海賊船！海の宝は森の中」をテーマに、小学生、先生方、静岡大学の学生の８０名ほどで共同制作した。海の命である水を送り出す森にこそ、海の宝があるという設定を、有志の先生たちで劇化するところから始めた。芸術村村長さんが森の神様として登場。この二日間だけのオリジナルソングも入れ込んだ。子どもたちが造形表現に自然に入り込んでいくための、感性を揺さぶるしかけである。子どもたちは、海の宝を探そうと、森を進む海賊船を夢中になって制作した。また、芸術村の古民家を竜宮城に見立て、各部屋に海の生き物もつくり飾った。吊り下げアートとして、ビニル、セロファン、ペットボトルなどの透明材を活用した。

<流木を組んだ森の海賊船　平成24年度>

<古民家に飾られた赤富士　平成25年度>

隔年で行われているこのワークショップは、普段の学校の授業ではなかなかできない、ダイナミックな共同制作が大きな魅力となっている。また、市内の１年生から６年生が共同でつくることで、そこに新しい仲間が生まれることも大きな魅力である。そして市内の先生方にとっても、素材開発という意味で、普段の授業づくりのヒントにもなっている。隔年のため、本年度は子どもとのワークショップは計画されなかったが、市内の先生方に呼びかけ、大人中心に貼り絵の富士山と竹の灯籠づくりを行った。葛飾北斎の赤富士に挑戦したグループは、忠実に再現しようと慎重に紙を貼っていった。一方、自由に富士山を表現したいグループは、ベニヤ板に古雑誌の紙を大胆に貼っていき、そこからまたイメージを膨らめていった。完成したときには日が沈み芸術村の古民家は暗闇に包まれた。ロウソクの灯で暗闇に浮かび上がる貼り絵の富士は、とても幻想的であった。現在、平成２６年度の夏のワークショップに向けて企画中である。

## （２）世の中とつながる社会科の学習

社会科では、新聞の活用を意識した。新聞には考える種がたくさんあり、そこからたくさんの問いが生まれてくる。４月２８日の主権回復の日では、怒りの拳を挙げる沖縄の人たちの記事を採り上げた。水産業の学習では、静岡県内のシラス漁やトラフグ漁の記事を、また、工業の学習では東京モーターショーの記事から、環境、デザイン、経済の問題に迫

った。またＴＰＰ関連の記事を取り扱うことで、５年生の学習である農業、水産業、工業をつないだ学びを構想した。

社会科とは、さまざまな人々の工夫や努力で、社会が成り立っているという実感や、その複雑である社会と自分自身がつながっているという実感を大切にしたい。富士山西麓のメガソーラー参入問題や、三保松原からの遠景と無数の電柱や看板の問題など、身近な所にもたくさんの考える種が存在する。自分たちの生活に直接つながる身近な問題を採り上げることで、その子の中に切実な問いが生まれ、主体的に学んでいく子どもの姿が見られた。

８月６日、９日、１５日や１２月８日、そして３月１日のビキニデーも避けては通れない。被爆６０年を迎える今年は、各新聞社の多くの記事を採り上げた。そして３月１１日。これらの日を仲間と考える事から、「空間・時間・問い」と「自分」とのつながりを実感する学びを目指している。

新聞記事に書かれていること、今、世の中で起こっている事実を「答え」と考えてみる。そして、その事実はさまざまな角度から見ていかないと、真実にはならないというメディアリテラシーの学びが価値付く。更にここに「なぜそのようなことが起こっているのか」という問いが立ち上がってくる。複数の情報を関連づけて、問いを立て、仲間と探っていくことで、自分の考えをつくり表現していく力を育てたい。ＮＩＥを全校に広げるため、校内に新聞記事コーナーも設けてみた。ＮＩＥは正にＥＳＤであると考える。

＜校内の新聞記事コーナー＞

## （３）地域とつながるけやき学習（総合的な学習）

６年生はけやき学習で、学年テーマ「ふるさと」に各クラスでさまざまな角度から迫った。

１組は富士山と岩北の自然に目を向け「富士山　Ｂｅｓｔ　ｓｈｏｔ　ｉｎ　岩北～自然を助ける６－１～」を立ち上げた。プロのカメラマンから実際に撮影の心得を学び、岩本山や茶畑からの富士山や蛍の里の写真を撮影した。そして、まちづくりセンターで「個展」を開き、岩北地区をいろいろな人にアピールした。

２組は、地域の人々が温かいことや楽しいお祭りがあること、いろいろなお店があって便利なこと、かりがねや岩本山などの自然に囲まれていることなどいろいろな視点から「６の２カンパニー～きれいな楽しい学校にしちゃいます～」を立ち上げた。特に世界文化遺産に登録された富士山に注目し、６年生として卒業する前に、学校に富士山をデザインに取り入れた遊び道具などを自分たちの手で作ろうと計画し、製作した。

＜富士山フェスティバルでふるさとの良さをアピール＞

３組は「富士山の魅力をさぐろう！～湧き水、ふるさとと富士山の絆～」を立ち上げ富士市の水道水の大部分を占める富士山の湧き水について調べた。すると、近年湧水量の減少や水質の変化などの問題が起きていることがわかったため、①水を大切に使うこと。②汚れを下水に流さないこと。③富士山の湧き水の通り道を汚さないことの３点が出された。早速、学校の下水に油汚れを残さないよう、下水路のそうじに取り組みました。水路の汚れを吸着することのできる水草も調査した。また、富士山の湧き水で作る「湧き水ゼリー」

の作り方も調べ、また、富士山の湧き水のおいしさを自分たちで感じ取る「効き水大会」を行い、どの水を使うかを決め、ゼリー作りに挑戦した。

４組は学年の「富士山フェスティバル」のプロデュースを担当。富士山の日として設定されている２月２３日に、富士山フェスティバルを開催して、下級生のみんなに富士山の魅力を伝えたり、良さを知ってもらったりすることにした。富士山フェスティバル当日は、たくさんの児童や保護者が、各クラスの取り組みに拍手を贈った。

## ３．ＥＳＤの魅力とこれから

持続発展教育（ESD）の実践を重ねてきた本校は、平成２５年度にユネスコスクールの認定を受けた。私自身、この１年間の実践を通して、次のようなＥＳＤの魅力を実感した。

一つは、切り口の多様性である。総合的な学習は言うまでもないが、造形教育や社会科の学習の中でも、国際教育であったり、情報や環境、人権教育であったりと、さまざまな角度から切り込むことの面白さがある。

二つ目の魅力は、学びのダイナミズムを挙げたい。実際に体験することで生まれてくるもの（失敗を伴うと更に価値が生まれてくる）や、ゲストティーチャーを招いたり、自分たちが地域に飛び出したりという活動の広がり。そして、身近なところから世界へという空間軸と、過去から未来へという時間軸という思考のダイナミズムを生むことが、大きな魅力である。

そして三つ目の魅力は、なによりつながることの楽しさである。さまざまな人とのつながりは喜びとなり、それが学びの楽しさや実感を生み出す原動力となった。また、つながるものは人ばかりではなく、その子の思考でもあり問いでもある。今のこの学習は、あのときの学習とつながっているということを実感したときの喜びは大きい。

これからのＥＳＤを考えると、総合的な学習と、教科・領域学習とのつながりを深めることが求められてくるだろう。そのためには、よりよいＥＳＤカレンダーのありかたを探っていきたい。大まかなラフスケッチから始まり、子どもと進めていく中で、書き加えたり時には書き換えたりの作業ができたらいい。いつも教室に掲示して、子どもも教師も全体像が見えていることが望ましい。着地点が変わることもあっていいのではないか。また、造形教育をＥＳＤマップとして整理することも有効ではないかと考えている。４年生の黒の造形のように、その学年の年間の造形を地図のように描いてみたり、木版画をパブロ・ピカソ、棟方志功、東日本、フィリピン、自分という時間軸と空間軸で整理するマップができるのではないか。　更にはつながる先として、他校や企業、そして静岡大学との連携を強めていきたい。造形教育としては、海外の学校と協働して造形表現をしてみたい。そこには異文化体験や、時として環境教育の領域とのつながりも模索できる。

美的体験の積み重ねから、美術館ばかりではなく、身のまわりの自然美を求めて動き出す子がいる。ＮＩＥの授業から、進んで新聞記事をスクラップする子がいる。特別活動の豊かな体験から、よりよい学校を創ろうと動き出す子がいる。「自分の行為は世界に響いている」というニーチェの言葉は、ユネスコスクールで学ぶ子どもの姿に表れていく。
学びの実感から未来をつくるのは自分だと動き出す子。それは、本校学校教育目標である「新しい自分になっていく」子どもの姿だと言える。ＥＳＤはこれからの時代を生きる子どもたちに必要な力を確かにつけていく、とても大切な教育なのだと強く思う。